

「ニート フリーターでもなく失業者でもなく」

玄田有史・曲沼恵美 共著

「ニート(NEET)」は、「Not in Employment, Education or Training」の頭文字からなる言葉で、雇用あるいは教育、職業訓練のいずれもしていない若者たちを指し、昨年の労働経済白書によれば、日本の平成15年度のニート人口は、年平均で52万人に及んでおり、「経済社会の維持、発展の観点からも憂慮すべき問題」と指摘されている。

本書は、厚生労働省の調査結果や若年無業者への面談等を通じて、ニートの現状分析とその課題解決等について論じたものである。

第1章で玄田氏は、「ニートと呼ばれる若者は、働かないのではなく働けない」のであり、その理由としては、人付き合いなど会社で巧くやって行ける自信がない、何が自分に合っているかわからないなどが上げられると言う。また、相談する相手がいないなど対人関係が希薄であるという性格的な特徴があると述べている。

これらのことを特徴的にまとめれば、「孤立した人間関係」「自分に対する自信の欠如」「中学・高校時代からの状況の継続」であり、ニートは私たちの周りにある現実であると述べている。

第2、4章では、曲沼氏の若年者の就労支援施設である「ヤングジョブスポットよこはま」の支援員や、ここに通う何人かの若者へのインタビューと、富山県での「地域に学ぶ14歳の挑戦」を経験した高校生などへのインタビューを通じて、ニートと呼ばれる若者たちの実態に迫っている。

第3章では、兵庫県と富山県が行っている中学2年生による5日間の職場体験「トライ

やるウィーク」と「14歳の挑戦」の実現までの経緯やその成果等について述べている。

「その成果は、『とにかく子どもの顔が変わった』の一言で言い表されている。14歳たちは、地域や職場の大人たちと5日間同じ空気を吸うなかで、確実に何かを感じ取って帰ってくるのだ」と、玄田氏は言う。

第6章で玄田氏は、「ニートは、どこか『社会経験の穴』が空いており、他人との緩やかな関係を保ちながら生きる経験が少なかったことが要因の一つである」と述べている。

玄田氏は、ニート増加の要因として、第1に「労働市場説」をあげている。90年代以降、若年者の就職環境は、偏差値の高い一部の大学生を除けば、どんなに努力して就活しても、希望が叶う職場が見つからないことの延長として、就職することをやめてしまった若者の増加があると仮説を立てる。

仮説の第2に、「教育問題説」をあげる。学校教育の中で、自分から学ぶ意欲を持つ者と持たない者、努力を続ける者と諦めた者との二極化が進行しており、学ぶことをやめてしまった若者は、「将来のことより今」や、「あくせくしても変わらない」と、自分の現状に納得する理由を自分自身で作り出していることとニート増加は関連していると分析する。

第3に、「家庭環境説」をあげる。家庭や地域で他者と交流する機会が持てないまま生きてきたことが、ニート人口増加の要因になっていると分析する。

そして玄田氏は、これらの要因を解消し得る手だての一つとして、「トライやるウィーク」や「地域に学ぶ14歳の挑戦」は、有効な手段であると論じている。

「生きる力」を育む教育が求められている今、学校教育に課せられた課題は大きい。

(幻冬社, 271頁, 1,575円) (梅田政勝)